

発掘調査の概要

〔石室の調査〕

横穴式石室は、遺体を埋葬する墓室である玄室（げんしつ）と、玄室にいたる通路である羨道（せんどう）及び玄室前道（げんしつぜんどう）からなります。本石室は、玄室長が約2.5m、羨道及び玄室前道長が約2.2mの全長4.7mの横穴式石室です。

玄室は結晶片岩を積み上げて構築されており、高さ1.4m程度まで残存していますが、天井石等は盗掘により取り除かれていました。玄室は盗掘を受けていたために、埋葬当時の状況は残されてはいませんでした。堆積していた土を除去した結果、須恵器の坏（つき）、土師器の小形壺、鉄鏃等が出土しました。また、石室内では屍床（ししょう）と呼ばれる遺体を直接のせるための施設が残存していることが明らかとなりました。

このほか、石室内に堆積していた土を持ち帰って篩（ふるい）により水洗した結果、須恵器坏、鉄鏃、ガラス製小玉・滑石製白玉・土製丸玉などが確認されました。

羨道部に設定した6トレンチでは、玄室の入り口を塞いだ閉塞石（へいそくせき）が、当時の状態を保ったまま確認されました。



玄室 西から



羨道部からみた閉塞石（6トレンチ）西から

〔墳丘の調査〕

1トレンチ

後円部の北側の墳丘斜面を確認しました。墳丘の斜面にはテラス（斜面の途中に造られた平坦な部分）が確認されました。テラスは幅約1mで、上面には少なくとも円筒埴輪1個体が樹立されていたと考えられます。墳丘は、埴輪より盛土によって構築されていますが、テラスよりも高い側の墳丘斜面では盛土内に扁平な礫を丁寧に積み重ねた様子が確認されました。

2トレンチ

後円部の東側の墳丘斜面を確認しました。墳丘の斜面では1トレンチより連続するテラス及び円筒埴輪列を確認しました。テラスの幅は約1.6mで、中央に南北に並ぶ円筒埴輪を3個体が樹立されていたことを確認しました。トレンチの東端では、地山が確認され、墳丘は埴輪より地山上に盛土を施して構築しています。

3・9トレンチ

後円部から前方部につながるくびれ部を確認しました。くびれ部では、後円部側で1・2トレンチより続くテラス面の円筒埴輪等3個体が樹立されていることを確認しました。このうち中央の埴輪付近では石見型埴輪が横倒しの状況で検出されたことから、中央の埴輪は、石見型埴輪の台部に相当する可能性があり、テラス面の円筒埴輪列に石見型埴輪が組み込まれて樹立していたと推定されます。

また、3トレンチでは西側へ傾斜する地山上に盛土を施して墳丘を構築していることが明らかとなりました。

4・5・7・8トレンチ

前方部の墳頂平坦面における埴輪の樹立状況を確認しました。4トレンチでは 前方部墳頂平坦面の東側の埴輪列を確認し、また、5・7・8トレンチでは西側の埴輪列を確認しました。前方部前面の範囲では埴輪列は残存していなかったものの、本来は円筒埴輪列が前方部墳頂平坦面を囲んでいたものと推定されます。

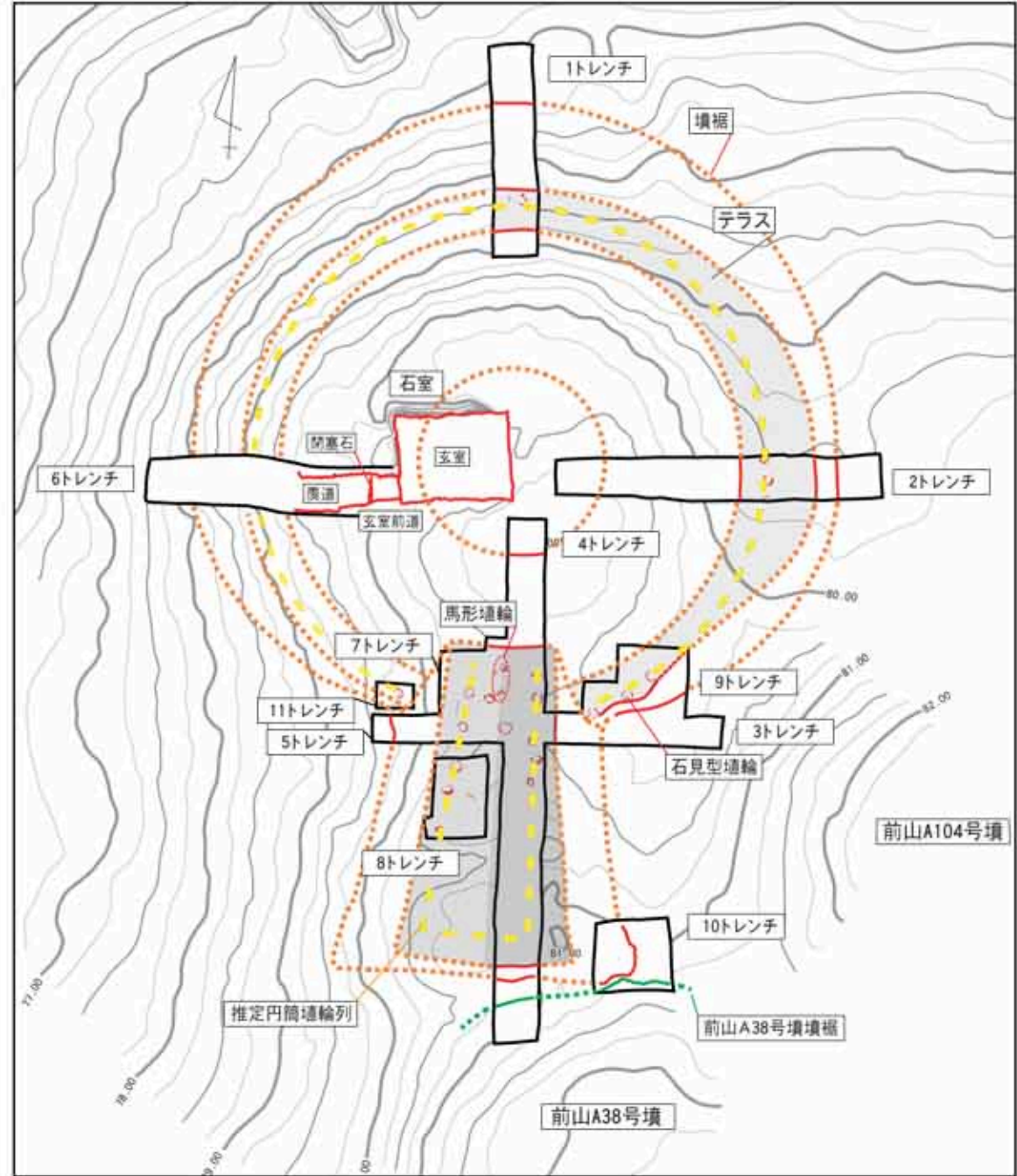
また前方部を円筒埴輪列で囲われた範囲の内側においては、後円部寄りて馬形埴輪の脚部が原位置で確認されました。この他原位置をとどめる埴輪が計3個体確認され、その一部は形象埴輪の台部である可能性があります。また、4トレンチの南端では、前方部の南端の埴輪が確認され、軟質の岩盤を削り出して埴輪を整形し、その上に盛土を施して前方部を構築していることがわかりました。

10トレンチ

前方部の南東隅（コーナー）を検出しました。4トレンチ南端と同様に軟質岩盤を削り出すことにより墳丘を整形しています。また、トレンチの南側では、箱式石棺をもつ前山A38号墳の埴輪及び墳丘斜面が確認され、同様に軟質岩盤を削り出している様子が確認されました。

11トレンチ

西側のくびれ部付近の後円部テラス面に樹立された円筒埴輪1個体を原位置で確認しました。



前山A58号墳 トレンチ配置図 (S=1/150)